



## オープン・ファクトリー

各地で「オープン・ファクトリー」が開催されています。

新潟の燕三条では日常的に工場を公開。SUWADA（爪切り製造）、玉泉堂（鋳起銅器製造）、マルト長谷川（ニッパー製造）、スノーピーク、マルナオ（箸製造）等々。30社ほどの企業が、見学者を受け入れます。それを前提にした工場もあります。たとえばSUWADA。刃先加工作業を、ガラス越しに見学できます。職人の目の前です。手元もモニターでみせてくれます。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」



期間を区切って見学会を開催する地域もあります。東京の大田区、墨田区、横浜の港北区、川崎市、岡山県の津山市などです。

大阪では、毎年秋に大正区と港区が開催します。筆者は2回参加し、木幡計器（圧力計製造）、昂（靴部材輸入加工）、山忠木材、飛鳥鉄工所（金属切削加工）などの中小企業を見学しました。いずれも「町工場」です。多人数を受け入れることが難しいため、見学者は10人くらいに分かれての見学となります。

参加者の多くは定年前後の年代層。移動は徒歩です。企業さんも作業服の雰囲気。工場の日常をみせてくださいます。案内の端々に、地域への愛情を感じる話が出てきたりと、くつろいだ気分で見学できます。

昨年、男子高校生が1人で参加していました。物づくりに興味があるとのこと。



▲操る町工場の若手社員

進学先を考えながらの参加なのでしょう。しっかりした高校生でした。小学生の子どもと参加されているお母さんもいました。高齢の参加者は体験機会を2人に勧め、物づくりを好きになってもらいたいという願いを表わしていました。

日本では、就労者のほぼ9割が雇用者になりました。朝になると職場に出かけ、夜に帰宅する。子どもは親が働く姿をみる機会が乏しい。大人が社会と関わる姿をみる機会が乏しいことは、子どもの勤労意識を育てるうえで、大きなハンディです。それを回復する手立てとして、オープン・ファクトリーの意味は大きいと思います。

緊急事態宣言で始めた在宅勤務は、子どもが親の仕事に触れる機会。オープン・オフィスとも言えそうです。子どもの勤労意識醸成に役立つ可能性を感じます。

（MBO 実践支援センター代表）